

安穩廟の永代使用料は85万円。ここから造成費分を差し引いた分が、墓を維持管理し、供養を続ける基金となる。年会費（通信事務費3,500円）が支払われなくなって17年たつと、中央の小山内部の納骨洞に合祀される



report

# 「血縁による跡継ぎを必要としない墓」を通じた「結縁」

会費を基金に運営する、誰にも開かれた永代供養墓——角田山妙光寺——

**家族をめぐる社会変化に応じた寺の再生と地縁・血縁を超えたコミュニティ形成**

新潟市の中心部から車で約1時間半。海にほど近く、山にも囲まれた自然の中に創建700年の日蓮宗寺院、角田山妙光寺が佇む。交通の便がいりわけでもない同寺に、全国から多くの人々が訪れる。契機となったのが1989年の永代供養墓「安穩廟」の開設だ。少子高齢化や核家族化、あるいは未婚化や離婚による単身者の増加で近年、家族による継承を前提としない同様の墓が全国的に増えている。妙光寺はその草分けだ。

「従来の墓制度は、墓と家と宗教がセットとなり直系男子が継承することを前提に成り立ってきた。でも今は社会の基本単位は個人で、跡継ぎのない家族が増えた。そのため墓を考え直し、寺のあり方も変えていこうと考えたのです」と住職の小川英爾氏。発端は「家の墓」の跡継ぎや入る墓がない人たちからの相談だった。一人娘が嫁いで墓を継ぐ者がいない親。自分たちの入る墓がほしいと懇願する未婚の姉、離婚した妹。また、小川住職自身も子どもは娘4人、妻も2人姉妹の長女で

木製デッキが敷かれた約100坪の院庭。時々ここで芝居やコンサート、展覧会などが開かれ、人々が賑わう。左手は平成13年に一新された本堂。奥に見えるのが客殿

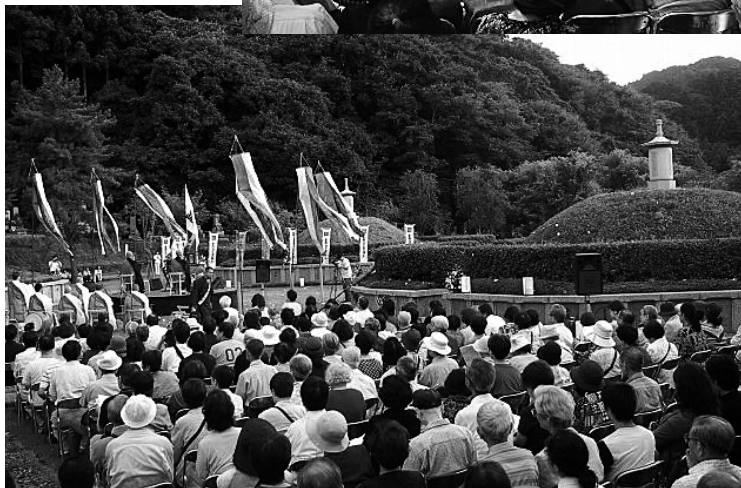


日蓮上人ゆかりの聖地として、鎌倉時代末期の正和2（1313）年に創建された妙光寺。山門から本堂正面を望む





「開かれた現代の寺」を象徴する本堂内部。あえて集成木材を使い、飾り物を省いて、本尊が台上に立つ



「角田山妙光寺」問い合わせ先

〒953-0011  
新潟市西蒲区角田浜1056  
TEL:0256-77-2025  
<http://www.myoukouji.or.jp/>

毎年8月に開かれる、「フェスティバル安穩」は、家族血縁、世代を超えて人々が集い、生き方について語り合う一大イベント。合同供養、生老病死を語るシンポジウム、交流パーティなど、新たな結縁の場を設けている

「継承者」はいない。「家の墓」とともに、檀家制度に支えられた寺は今後存続しえないと痛感した。

「過疎化と高齢化が進む地方では『もう住職はいらない、儀礼さえ残ればいい』とさえ言われます。残るのは墓と建物としての寺だけ。早晚寺は立ち行かなくなる」

そこで寺が墓を分譲、申し込み者からの管理費と供養料を基金に利息で運営する永代供養墓のアイデアが生まれた。将来に不安を感じていた檀家役員たちもこれに賛同。銀行から約3千万円の融資を受けて「安穩廟」1基目を開設した。円墳を取り囲むように108区画の墓を設け、各墓には宗派を問わず、個人でも友人同士でも自由に入れる。継承者がいなくなれば中央の共同墓に合祀する。利用者は「安穩会員」となり、檀家とは違った形で妙光寺の活動にも参加できる。全国から申し込みが殺到した。予想を上回るペースで計画の4基がすべて満杯になり、2002年には隣接地に新区画を開設。現在もさらに増設を進めている。

特筆すべきは、会員を核にしたコミュニティが着実に育っていることだ。なかでも毎年8月、合同供養と会員、檀家信徒、地域の人々の交流を目的に開催する「フェスティバル安穩」が大きな役割を果たす。趣旨に賛同した若い応援スタッフも全国から参集する。こうした動きは、かつて地域社会で中核的な役割を担ってきた寺院の再生に他ならない。

「地縁・血縁を超えた結縁が着実に広がっています。これからは仏教者として皆さんの「仏縁」にも積極的に働きかけていきたい」と意欲を燃やしている。

(文責・CEL編集室)

CEL

「いまや、社会の基本単位は個人。これまで家族血縁で担ってきた支え合いを、社会のみんなで担保していくことが必要でしょう」と話す小川住職



安穩廟が申し込みで満杯となり、8年前隣接地に開設した「杜の安穩」。1基は直径2mで8区画の集合墓。安穩廟と同様に、納骨部の壁面には戒名や俗名のほか、思い思いの文字や文章が記されている

